

[論文]

『到着者リスト』にみるパラタイン移民

中 川 順 子

A Study on the Palatines who came to England in 1709

Junko NAKAGAWA

要旨

This article aims at examining profiles of the Germans – the so-called *Poor Palatines* – who came to England in 1709. It is said that more than twelve thousand Palatines had left their homeland (the Rhine Valley) and arrived at London over a period of six months. Although most of them embarked for North America or Ireland within a few years, their stay in London had a great impact on British society. The reaction of the British government to them was debated at that time. The government ordered surveys about them in order to assist them. The lists were made on the basis of the surveys. The lists contain a valuable source of information on the age, the religion and the occupation of the head of the family and the ages of the members of the family. I will make clear the character of the Palatines by scrutinizing the lists. This analysis leads us to understand why the Palatines encountered so much hostility in British society.

Keywords : the Palatines, lists of Germans, reception of aliens, Lutheran (German) church, character of immigrants, 18th-century London, British colonies

1. はじめに

1709年はイギリス移民史において注目に値する年である。なぜならば、この年に「プロテスタントのための一般帰化法」、いわゆる「一般帰化法」が議会を通過したからである。この法は、原則としてその対象をプロテスタントに限定していたが、それ以前よりも簡便な方法で「生まれながらのイギリス人と同等の権利」、すなわち「帰化」をイギリス人以外に認めるものであった。しかしながら、「一般帰化法」は1712年に撤廃されることとなる。その一因として、「一般帰化法」が、当初イギリス側が意図し、期待したような

イギリス社会にとってその存在が有益となる移民ではなく、むしろイギリス社会にとって負担となる貧しい移民を呼び寄せる事態を引き起こしたのだ、という当時の認識が挙げられる⁽¹⁾。「一般帰化法」撤廃をめぐる議論について、本稿で詳しく言及することはしない。しかし、撤廃の原因がどのようなものであれ、「ありがたくない移民」の存在は、議会内外の移民支援者、移民受け入れ反対論者の双方を巻き込みながら展開した「一般帰化法」存続の是非をめぐる議論の重要な焦点のひとつであったことを指摘しておきたい⁽²⁾。それまで、基本的には移民受容路線を採用してきたイギリス政府であるが、このときその方針や支援のあり方について再考を余儀なくされるのである。その「ありがたくない移民」こそが、本稿で扱う「貧しい（可哀想な）パラタイン移民」と呼ばれる人々であり、彼らがイギリスに大挙して流入したのがまさに1709年だったのである。

18世紀初頭のイギリス社会において、移民受容をめぐる問題の重要な鍵を握ると考えられるパラタイン移民であるが、イギリス流入時の彼らに関する研究は、16世紀後半の大陸出身の移民や17世紀後半のユグノーに比して、決して多いとは言えない。H・A・HomesやW・A・Knittleらの研究があるものの、いずれもパラタイン移民の更なる移民先である北米植民地での定住状況を中心に考察がなされている。後者のKnittleの著作以降、研究論文はあるものの、管見の限りにおいて、パラタイン移民については、まとまったモノグラフは刊行されていないようである⁽³⁾。在英ドイツ移民史研究においても、18世紀以降のドイツ系移民の前史として簡単に紹介されているにすぎない⁽⁴⁾。我が国においては、勝田俊輔氏がパラタイン移民のアイルランド定住を扱った興味深い論考を近年発表している⁽⁵⁾。

パラタイン移民が研究対象とされてこなかった理由としては、次の点が挙げられよう。かねてより、近世移民史では技術移転論や文化的貢献論からイギリス社会における移民諸集団を研究する傾向が強い⁽⁶⁾。しかしながら、パラタイン移民の流入は1709年に集中しており、加えて彼らの多くがロンドン到着後1～2年以内にそこを離れている。したがって、彼らによるイギリス社会への「貢献」が少ないことが研究対象から除外された理由のひとつと考えられる。近年、ようやく移民についても社会史的研究が行われるようになって

たが⁽⁷⁾、そのためには、当該移民についての史料が豊富でなければならない。17世紀後半のユグノーや16世紀後半のフランスやネーデルラント出身の移民については、ユグノー・ソサイエティや外国人教会を中心に史料の収集や整理・刊行が進んでいる。そのことは子孫たちの「記憶」や「アイデンティティ」への関心の高さを示すと同時に、豊富な研究蓄積へと結実している⁽⁸⁾。ユグノー研究活況の背景としてはプロテスタント・ネットワークにかかる議論の影響も看過できないであろう⁽⁹⁾。以上のように考えるならば、パラタイン移民に関しては、自らの記憶を残すことも、そのための後続の努力もイギリス本国では十分に行われてこなかった。このこともイギリス本国におけるパラタイン移民研究の乏しさにつながっていると考えられる。

しかしながら、18世紀初頭のパラタイン移民は、それ以前の移民と比較した場合、短期間に大挙して流入したがゆえに、彼らの存在がイギリス社会に与えたインパクトはむしろ大きかったと言えよう。それは、18世紀初頭のイギリスの移民対策（政策）や、移民の社会受容、移民支援の内容や方向性に影響を与えるには十分なほどであった。彼らに対するイギリス社会の対応を、移民支援や当時の帝国経営の視点から検討するならば、技術や文化における貢献論からだけでは看取できないパラタイン移民の新たな歴史的評価が可能になるはずである。

上述の問題意識に基づき、本稿ではパラタイン移民に関する論考を行う前段階として、パラタイン移民がどのような移民集団であったのかを明らかにする。史料は *Lists of Germans from the Palatine Who Came to England in 1709*（本稿では以下『到着者リスト』と略す）を用いる⁽¹⁰⁾。この史料を手がかりに、16世紀後半の大陸出身者や17世紀後半のユグノーなどと比較しながら、移民集団としてのパラタイン移民の特徴を明らかにしたい。

2. パラタイン移民の流入と彼らへの対応

（1）移動の背景

なぜパラタイン移民はイギリスを目指したのか。パラタイン移民の出身地は主に南西ドイツ、プファルツ地方である。当時の記述によれば、彼らの出身地はいわゆる狭義のプファルツ地方を越えて、ライン川中流域周辺、モー

ゼル川やマイン川流域、ナッサウやアルザスなどを含む広い地域であった。彼らが前代未聞の規模で祖国を離れた原因は、スペイン継承戦争など相次ぐ近隣地域での戦争、戦費調達のための重税、フランス軍の侵入による国土の荒廃、宗教迫害、1708年から1709年初頭にかけての天候不順に伴う厳しい冷害のためと言われている。セーヌ川やローヌ川、沿岸部なども凍結するほどの寒波は、当時イギリスの年代記編者であったNarcissus Luttrellの記録によれば、多くの国で死者を出すほどであった⁽⁴¹⁾。プファルツ地方の主産業はワイン用のブドウ栽培であるが、このときの冷害はブドウの木に壊滅的な被害をもたらしたと言われている。

土地やよりよい生活を求めて新天地で一旗揚げるとする者も少なくなかった。その当時、苦境にあえぐパラタイン移民たちをイングランド、北米へと駆り立てる小冊子類や書籍類が存在した。ライン川流域で広く流布していたこれらのパンフレットでは、北米植民地の気候やそこでの生活が絶賛のうちに紹介、宣伝されていた。そのような書籍のひとつに、一般に『金の本(*Golden Book*)』と呼ばれ、版を重ねた書物がある。その内容は、支援を確約していないとはいえ、アン女王の絵が挿入されていたこともあり、イギリス経由での植民地移住をアン女王が支援するとの期待を彼らに抱かせるものであった。イギリス議会内委員会の調査報告によれば、パラタイン移民自身がこの書籍の存在や支援への期待を移動の理由として証言している。

17世紀後半以降のイングランドでは、人口は国力であり、本国やとりわけ植民地の不足する人口を移民で補うべきとの認識があった。実際に、植民地の地主たちによる植民地への移民誘致活動・宣伝が様々なレベルで積極的に実施されており、そのために、植民地、本国、プファルツの間をエイジェントが往来していた。一方、政府や国王も、プロテスタント難民への金銭的支援と彼らの植民地への移住支援を行っていた。ユグノーへの義援金募集はその一例であるし、チャールズ2世は技術移転を期待し、ユグノーをサウスカロライナに送り出している。1689年にウィリアム3世はユグノーの王国内移住に対し、支援を約束している。そのような社会背景のもと、移民推進政策の一環として「一般帰化法」はすでに半世紀近く、その導入をめぐる議論が続けられていた。それが議会で認可されたときにはすでにパラタイン移民の

移動が始まっていたので、「一般帰化法」の認可が直接的なブル要因とは言えない。しかし、イギリス政府の姿勢と政策は大陸でも知られるところであり、法制定への期待が彼らのイギリス行きを後押しした可能性は否めない⁽¹²⁾。

(2) イギリスへの上陸、その後のバラタイン移民

1709年2月にバラタイン移民は移動の準備を始めたと言われている。彼らはわずかな財産と地元当局が作成した人物に関する推薦状を携え、まずはライン川を下りオランダに向かった。オランダではハーグの外地駐在事務官であったJames Dayrolleが彼らの渡航のための窓口となった。彼はバラタイン移民を国家にとって重要な労働力と考えていたため、彼らの移動にあたっては政府とアン女王から承認と支援を得るべく尽力している。その結果、1709年の4月に政府支援のもと約850人がオランダからイングランドへ渡った。その後、イングランドへの渡航を希望し集まるバラタイン移民の人数は増加の一途をたどり、Dayrolleはその対応に奔走することとなった。渡航費用は当初、誘致に積極的であったイギリス政府が負担した。もちろん、なかには自前の資金や個人の慈善に頼って渡航する者もいた。同年の7月までに1度につき約1000人から3000人の規模で移動が続き、徐々にその数は減るものの、同年10月までバラタイン移民流入の波は続いた⁽¹³⁾。

わずか3ヵ月の間に約10,000人もの移民がロンドンに上陸した。当初、移民誘致を支援した政府であるが、あまりの人数の多さに数ヵ月も経たずと、Dayrolleに移民の移送停止を指示している。船が着く度、そこからあふれ出る移民たちに十分な住居と食料を提供することは容易なことではなかった。彼らはロンドン郊外、テムズ川南岸のブラックヒースやグリニッジ、キャンパーウェル、ロンドン塔以东の地域（セントキャサリンズ、ウォッピング、イースト・スミスフィールドなど）に設置されたテントに収容された。また、篤志家の協力によりケンジントンやウォルワースに納屋や倉庫などが一時的な住居として用意された。いずれも過密状態で、彼らは不衛生な環境のなかでの生活を強いられていた。彼らの窮乏のほどは深刻で、持参したわずかな財産を売りながら、あるいは物乞いをしながら日々のくぐ有様であった。劣悪な環境下、病気になる者や死亡する者が相次ぎ、死亡率は20%に達したと

も言われている⁽¹⁴⁾。そのような彼らの状況は富裕な人々に流行病などの病氣蔓延の不安を与え、彼らの貧しさは下層の人々に雇用や最低賃金をめぐって敵意と怒りをもたらした。イギリス社会には移民の退去を求める声も少なかった。

もちろん、上流階級の人々の中には個人的にパラティン移民に支援を行う人々も少なからず存在した。アン女王もパラティン移民の窮状に同情し下賜金を与えている。政府も当初は移民全体に1日につき20ポンド支給した。7月にはその額が1日につき80ポンドにまで達しており、そのことが問題になっている。管轄地域にパラティン移民の滞在所があったミドルセックスの治安判事は、彼らのあまりの困窮ぶりに彼らへの慈善をアン女王に嘆願している。その結果、女王の命により義援金の募集が行われ、約22,000ポンドの義援金が集められた。ただし、この額は17世紀後半のユグノーに対して集められた義援金の3分の1程度の額であった⁽¹⁵⁾。

移民救済に際して、その活動を期待されたのは外国人教会である。ユグノーに対しては、フランス人教会のスレッドニードル・ストリート教会が中心となり、富裕なユグノーの支援を受けながら、組織的な同胞の救済活動を展開した。一方、1709年の段階でロンドンにはドイツ人教会が4つ存在した。しかし、ドイツ人教会はフランス人教会ほど財源にも支援を期待できる共同体にも恵まれておらず、パラティン移民の救済に関しては概して消極的であったようである⁽¹⁶⁾。

自前の救済システムを持たないパラティン移民を支援し続けることは政府にとって過度な負担であり、早急な対策が求められていた。商務庁がその担当として、1709年5月以降、定期的にパラティン移民の問題、とりわけ彼らの移転問題を検討している。まず、地方への移住が計画された。ところが、ユグノーに対しては6つの地方都市当局が資金提供もしくは受け入れを表明したにもかかわらず、パラティン移民の時にはそれがほぼ皆無であった。しかしながら、半ば無理矢理にロンドンから地方都市へパラティン移民を移住させている。政府はパラティン移民を受け入れたところには移民1人につき3ポンド支払い、さらにはそこまでの旅費も負担した。また、受け入れ先の負担とならないよう、資金的配慮もしている。しかし、その成果は一時的な

もので、概して成功とはいえなかった。例えば、リバプールは130人を受け入れるが、政府からの援助が終了すると彼らを追い出している。シリー島に600人を移住させる計画が提案され、実際にパラタイン移民約100家族を乗せた船がロンドンを出航したが、現地での抵抗にあい、移民が島に定住することはなかった。地方へ移った者の多くは自発的であれ、強制的であれロンドンに戻ってきた⁽¹⁷⁾。

イングランドに残る者、祖国に戻る者もいたが、結果的には、大勢のパラタイン移民が第二の移住先へと向かった。それが、北米植民地であり、アイルランドであった。イングランドにきたパラタイン移民たちのなかには、もとより北米行きを希望する者が多かった。アイルランドや北米に行く者たちに対しては渡航費用や当座の必需品などが支給された。1709年8月以降、約3070人がアイルランドへ移住した。ただし、入植後にロンドンや大陸に戻る者が絶えず、入植は必ずしも順調ではなかった。1712年の時点でアイルランドには254家族が入植し、うち140家族が南西部のリムリック州に入植している⁽¹⁸⁾。一方、北米植民地に向けては、1709年10月から、翌年にかけて約3700人が出航している。ジャマイカやバルバドスなど西インド地域、南米に送られる場合（計画）もあった。イギリス本国では、自らの居場所を見いだせなかったパラタイン移民であるが⁽¹⁹⁾、その原因はどこにあったのか。彼らの受容を阻んだものとは何であったのか。その要因は必ずしもひとつではないであろうが、以下ではその一端を明らかにするべく、彼らがどのような集団であったのかを検討したい。

3. 『到着者リスト』にみるパラタイン移民

(1) 史料について

北米移住後のパラタイン移民に比べて、イギリス本国滞在時の彼らに関する情報は必ずしも豊富とはいえない。彼らのことがわかる史料としては、彼らがオランダを出帆するに先立ってイギリス政府に送られた渡航者の一覧表がある。この一覧表からは1709年5月から7月にかけて、計4回で約11,000名がイギリスに向けて出発しようとしていたことがわかる。しかし、この史料も8月以降の渡航者や私費渡航者についての情報はなく、これ以上の詳し

い情報を得ることはできない⁽²⁰⁾。

そこで、本稿ではJohn TribbekoとGeorge Andrew Rupertによって記録された4つの『到着者リスト』を手がかりにパラタイン移民の特徴を検討する。今回使用した史料は、Public Record Officeに所蔵されているC.O.388/76,56ii,64,68-70をThe New York Genealogical and Biographical Recordが刊行したものである。ただし、この史料も完全ではない。このリストに記載されているのは、パラタイン移民全体の約半数だからである。しかしながら、この史料は人数以外にも、宗派や職業、家族構成、子どもの人数や年齢が記載されており、記録の少ないパラタイン移民にあつては、その特徴を明らかにする貴重な情報源となっている。

このリストを作成したTribbekoとRupertはいずれも聖職者である。前者のTribbekoは、アン女王の夫君（George of Denmark）によってジェイムズ宮殿内に設置された宮廷礼拝堂つき牧師である。後者のRupertはロンドンのサヴォイにあったルター派のドイツ人教会（聖メアリ教会）の牧師であった。聖メアリ教会は18世紀のロンドンでドイツ人教会の中心的存在として、王室の庇護を受け発展した教会である⁽²¹⁾。イギリス当局にとって、公式であれ非公式であれ、外国人移民の調査や把握に外国人教会の協力を求めるのは常のことであった。

到着した多くのパラタイン移民が先行き不安定な状態で困窮するなか、イギリス社会、とりわけロンドンの人々の彼らに対する敵意や不信任は深刻なものとなっていた。彼らをイングランド内に留め置くにせよ、植民地へ送るにせよ、彼らへの対応を考慮するために、商務庁はパラタイン移民の人数や状態を調査、報告する必要に迫られていた。そこで商務庁は前述した2人のドイツ人教会関係者にその調査を委託した。彼らは5月9日に商務庁に次のような報告を行っている。パラタイン移民たちが大変困窮しており、また彼らのなかには、日々の生活に事欠く状態のため、病気の者もいること。多くが、裸同然の状態であったこと。狭い場所に大人数で詰め込まれていることなどを報告し、リストの作成に着手したのである⁽²²⁾。

『到着者リスト』は4種類のリストから構成されている。（1）5月6日付、12日に受領された分（以下D.57）。これは到着第1陣の調査報告書で4

月末ごろにオランダを出発して5月の初めにロンドンに到着し、ロンドン東部のセントキャサリンズに収容された者たちの記録である。(2) 5月27日付分(以下D.64)。これは、調査日以前に到着しロンドン南部のサザック地区のウォルワースに収容された者たちの記録である。(3) 6月2日付分(以下、D.68)。到着第3陣で、第1陣と同じくセントキャサリンズに収容された者たちの記録であり、6月21日に受領されている。(4) 6月15日付分(以下D.69)。6月11日にセントキャサリンズに到着し、6月15日に同地区またはテムズ南岸、アイル・オブ・ドッグズ対岸のデトフォードに収容された者たちの記録である。これは6月21日に受領されている。加えて、5月1日から6月11日までの到着者数の合計が6月16日に受領されている(D.70)。ただし、『到着者リスト』に記載されている各種合計人数は、必ずしも正確なものではなく、数え間違いや重複計算が見られる。したがって、本稿ではリストのデーターから今回改めて算出し、修正した数値を採用している。また、日付はリストに記載されている日付を採用しているが、それらは先の渡航者一覧として残されている記録とは必ずしも一致していない。

『到着者リスト』に記載されている内容は次のとおりである。世帯主の氏名と年齢。寡婦と未婚女性も世帯主としている。世帯主の年齢と職業(男性のみ)。配偶者の有無。子どもの性別、人数、年齢。世帯主の信仰である。残念ながら妻の年齢は不明である。調査項目から明らかなことは、イギリス側がバラタイン移民の人数や宗派、職業を把握しようとしていたことである。この点は16世紀後半に外国人に対する調査がロンドンで実施されたときの状況とほぼ同じである。16世紀後半の外国人調査で行われた出身地や渡航目的、滞在期間、同居人の有無、denization取得の有無などについての調査が、バラタイン移民に関して不必要とされたのは、彼らに対する調査が彼らの到着後すぐに行われたことや、Dayrolleを通じて彼らの渡航目的や出身地に対する情報がある程度認知されていたからであろう⁽²³⁾。彼らは救済するに値する同胞なのか、イギリス社会にとって有益となる者たちなのか。宗派と職業という調査項目は、イギリス社会の彼らへの眼差しを顕然と示していると言える。

(2) 『到着者リスト』にみるパラタイン移民

Knittleによれば、1709年の5月初旬から同年10月中旬ごろまでにロンドンに到来したパラタイン移民は約13,500人と推算される⁽²⁴⁾。4つの『到着者リスト』には、6455人が記録されており、それは到来したパラタイン移民の約半数にあたる⁽²⁵⁾。参考までに記すると、当時のロンドンの人口は約50万人であった⁽²⁶⁾。到着者の内訳は男性の世帯主が1646人、女性の世帯主が202人、妻が1204人、息子が1722人、娘が1671人、詳細が不明な者10人となっている(表1)。性別が不明の10人を除いて、世帯主および妻の男女比は男性が1646人(54%)、女性が1406人(46%)である。子どもを加えた場合の男女比は男性が3371人(52%)で女性が3077人(48%)となり、男女比に大差はない。続いて、配偶者の有無については(表2)、配偶者のいる男性世帯主は1204人で、男性世帯主の約7割である。到着者の多くが家族連れであった。

表1 到着者人数

	D57 (人)	D64 (人)	D68 (人)	D69 (人)	計 (人)	%
世帯主 (男)	219	311	703	413	1646	25
世帯主 (女)	18	37	97	50	202	3
妻	165	227	506	306	1204	19
息 子	222	323	736	441	1722	27
娘	215	296	725	435	1671	26
不 明	10				10	0.2
小 計	849	1194	2767	1645	6455	

(出典) J.Tribbeko and G.Ruperti (eds.), *Lists of Germans from the Palatine who came to England in 1709*より作成した。なお割合については数値を四捨五入した都合上、合計が100%になっていないものがある。

表2 配偶者の有無

	D57 (人)	D64 (人)	D68 (人)	D69 (人)	合計 (人)	%
妻帯者	165	227	506	306	1204	65
無配偶者 (男性)	51	84	197	107	439	24
無配偶者 (女性)	18	37	97	50	202	11
無配偶者合計	69	121	294	157	641	35
不 明	3					
女性のみ						
寡 婦	12	16	69	22	119	6
未 婚	6	21	28	28	83	4

(出典) J.Tribbeko and G.Ruperti (eds.), *Lists of Germans from the Palatine who came to England in 1709*より作成した。

表3 世帯主の年齢

歳 (代)	D57 (人)	D64 (人)	D68 (人)	D69 (人)	合計 (人)	%
10	4	14	37	20	75	4
20	62	118	342	141	663	36
30	81	116	157	137	491	27
40	48	60	160	103	371	20
50	31	34	73	46	184	10
60	4	6	30	15	55	3
不 明	7		1	1	9	0.5

(出典) J.Tribbeko and G.Rupert (eds.), *Lists of Germans from the Palatine who came to England in 1709*より作成した。なお割合については数値を四捨五入した都合上、合計が100%になっていないものがある。

世帯主の年齢は(表3)のとおりである。20代と30代が全体の約6割を占めている。女性の場合は、30歳未満が91人、30歳以上は各年代ほぼ25人前後である⁽²⁷⁾。30歳未満の人数が突出しているのは、女性の世帯主が未婚女性と寡婦という分類であることを反映している。寡婦の平均年齢は約47歳である。また、60歳以上の女性世帯主は全員寡婦であるが、これは寡婦の2割、60歳以上の全世帯主の約半数に相当する。子どもを同伴しない高齢の寡婦もあり、彼女らがどのような動機で渡航を決意したのかは興味深い点である。

『到着者リスト』に見られる子どもの姿を検証してみたい(表4)。息子と娘の年齢で共通することは、息子、娘共に10歳未満の子どもが多いということである。いずれも10歳未満の子どもがその総数の6割を占めている。『到着者リスト』によれば息子、娘共に1歳未満の子どもが70名おり、なかには移動中、またはイングランド到着後に出産したと思われるケースも見受けられる。身重の妻を伴う移動や幼子を抱えての新しい土地での生活が困難なものであったことは想像に難くない。イングランドにやってきたパラティン移民のうち1000人近く死亡したとも伝えられている⁽²⁸⁾。その詳細は定かでないものの、衛生環境が悪いなか、若い子どもがその犠牲になったとしても不思議ではないであろう。10歳以上の子どもに関して言うならば、その多くが10代に集中する。25歳以上の息子や娘もそれぞれ20人前後、記録されている。36歳の娘を筆頭に30歳以上の娘3人を伴ってイングランドに来たのは59歳の鰥夫であった。彼女たちは老齢に近い親の世話をするために共に来たのであろうか⁽²⁹⁾。

表4 子どもの人数と年齢分布

年齢	D57 (人)		D64 (人)		D68 (人)		D69 (人)		年齢別合計(人)	合計(人)	%
	息子	娘	息子	娘	息子	娘	息子	娘			
1 d			1						1		
2 d								1	1		
5 d	1				1				2		
6 d		1							1		
8 d						1	1		2		
2 w							1		1		
6 w						1			1		
1 m		1			2	2		1	6		
2 m			1		3	2			6		
4 m								1	1		
0.3	2	4	2	5	12	9	4	3	41		
0.6	3	4	4	5	14	15	8	6	59		
0.9	3	2	2		5	6			18		
(1歳未満)											
息子	9		10		37		14			70	
娘		12		10		36		12		70	
合計										140	4
1	14	15	16	14	39	31	27	25	181		
1.3	1	3	2	1		1		0	8		
1.6	9	9	4	3	4	10	3	4	46		
1.9	1								1		
2	13	12	27	23	61	56	30	29	251		
2.6	3	3				1		1	8		
3	12	13	31	26	40	44	33	25	224		
4	14	18	27	20	47	58	22	32	238		
4.6	1								1		
5	12	11	25	20	46	45	25	22	206		
6	24	15	24	21	48	56	28	25	241		
7	6	11	14	19	50	39	31	18	188		
7.6	1								1		
8	16	15	20	15	46	36	22	27	197		
9	11	9	15	9	40	40	20	12	156		
(10歳未満)											
息子	147		215		458		255			1075	
娘		146		181		453		232		1012	
合計										2087	62
10	16	4	17	15	40	42	23	26	183		
11	8	4	12	18	31	30	14	13	130		
12	12	12	12	14	33	31	26	25	165		
13	4	4	7	12	24	23	15	16	105		
14	8	7	16	9	21	21	15	32	129		
15	1	6	5	5	17	19	13	10	76		
16	3	4	10	6	21	11	15	14	84		
17	5	5	4	6	9	7	9	12	57		
18	3	3	6	11	19	25	15	19	101		
19	2	3	1	5	6	12	2	9	40		
20	4	6	9	4	26	13	12	9	83		
21	0	1	3		7	9	5	3	28		
22	3	3		2	3	8	7	4	30		
23	2	2	2	1	5	5	1	2	20		
24	3	1	3	2	7	4	9	4	33		
25	0	3	1	1	4	4	1	1	15		
26	0			1	2	2	2	1	8		
27	0			2		2	1	1	6		
28	1				1	1		2	5		
29							1		1		
30				1		1			2		
33					2	1			3		
36						1			1		
(10歳以上)											
	75		108		278		186			647	
		68		115		272		203		658	
										1305	38
不明		1							1		
合計人数	453	441	656	487	1509	1214	896	679	3393		

(註) 表中の d は day(s), w は week(s), m は month(s) の略である。(出典) J. Tribbeke and G. Ruperti (eds.), *Lists of Germans from the Palatine who came to England in 1709* より作成した。なお割合については数値を四捨五入した都合上、合計が100%になっていないものがある。

表5 世帯規模

人数(人)	D57(世帯数)	D64(世帯数)	D68(世帯数)	D69(世帯数)	合計(世帯数)	%
1	57	108	257	137	559	30
2	23	29	74	49	175	9.5
3	36	51	96	55	238	13
4	45	45	110	65	265	14
5	35	48	98	55	236	13
6	20	37	82	50	189	10
7	12	18	43	30	103	6.0
8	5	6	22	8	41	2.2
9	3	3	10	10	26	1.4
10		2	6	2	10	0.5
11			1	2	3	0.2
12	1	1	1	0	3	0.1

(出典) J.Tribbeko and G.Rupert (eds.), *Lists of Germans from the Palatine who came to England in 1709*より作成した。なお割合については数値を四捨五入した都合上、合計が100%になっていないものがある。

表6 世帯主の宗派

宗派	D57(人)	D64(人)	D68(人)	D69(人)	合計(人)	%
改革派	133	144	290	146	713	39
ルター派	55	131	243	128	557	30
バプティスト派	12	0	0	1	13	0.7
メノン派	0	1	1	1	3	0.2
カトリック	24	66	261	177	528	29
不明	13	6	5	10	34	2
合計	237	348	800	463	1848	

(出典) J.Tribbeko and G.Rupert (eds.), *Lists of Germans from the Palatine who came to England in 1709*より作成した。なお割合については数値を四捨五入した都合上、合計が100%になっていないものがある。

次に世帯規模についてである(表5)。単身者は全体の約3割の559人(世帯)。夫婦のみ、もしくは親1人子ども1人の家庭という家族2人という世帯が175世帯であり、このグループは1割にも満たない程度である。あとはひと家族3人が238世帯、4人が265世帯、5人が236世帯、6人が189世帯と、ほぼ同じ割合である。パラタイン移民の多くが夫婦と子ども数名という家族構成となっている。それほど多くはないが、1世帯10人以上の家族も16家族見受けられる。寡婦の場合は約半数が子どもをつれての移動である。

信仰の面からはどのような特徴があるのであろうか(表6)。世帯主の宗派を大きくプロテスタントとカトリックに分けるならば、その割合はプロテスタントが約7割、カトリック教徒が約3割である。プロテスタントの内訳

は改革派（カルヴァン派）が713人で約4割、ルター派が557人で3割となっている。他にプロテスタントのバプティスト派やメノン派が若干名含まれている。『到着者リスト』から明らかなことは、改革派、ルター派、カトリック教徒の割合に大差がなく、パラタイン移民が同一の信仰をもった集団ではなかったということである。それは同時に彼らが宗教迫害を理由に移動して来たと単純に断言できないことも示唆している。世帯主の宗派を家族の宗派とみなし、世帯規模からカトリック教徒の人数を試算するならば、その人数は1848人となる。これは『到着者リスト』に記録されている人数の約3分の1に相当する。

パラタイン移民のなかにカトリック教徒がいることは、大陸で彼らの渡航を世話していたDayrolleも既知のことであったが、6月24日の段階でイギリス当局は彼にカトリック教徒を移送しないよう命じている。救済の対象はあくまでもプロテスタントであったため、ロンドンにおいてであれ、オランダにおいてであれ、カトリック教徒がイングランドに渡航・滞在するためにはプロテスタントに改宗することを要求された。さもなくば、大陸に戻るよう求められた。『到着者リスト』と異なる記録⁽³⁰⁾によれば、1709年の9月には2257人のカトリック教徒（プロテスタントも一部含まれていたが）がオランダに送還されている。彼らの帰国にあたっては、政府が1人あたり5ギルダーの資金を提供している。1711年の初旬には618人が同じくオランダに移送された。また、イングランドでの滞在は認められないものの、カトリック教徒であるパラタイン移民に対して、国外任務に就くイギリス軍への徴募が提案されたこともあった⁽³¹⁾。国内

表7-1 世帯主の職業

職 種	人数 (人)	%
A 農業／ブドウ栽培	1059	64.5
B 織物・被服関連業	132	8.1
C 木工業	131	8.0
D 金属加工業	51	3.1
E 皮革業	45	2.7
F 飲食関連業	101	6.2
G 煉瓦・石工業	55	3.4
H 教育業	16	1.0
I 医療	3	0.2
M その他	43	2.6
合計	1636	

(註) 職種の前アルファベットは表7-2の各職種の後に付いているアルファベットに対応している。

(出典) J.Tribbeko and G.Rupert (eds.), *Lists of Germans from the Palatine who came to England in 1709*より作成した。なお割合については数値を四捨五入した都合上、合計が100%になっていないものがある。

表7-2 世帯主の職業

職 種	D57 (人)	D64 (人)	D68 (人)	D69 (人)	合計 (人)	%
baker (F)	2	10	11	11	34	2.1
bookbinder (H)	1				1	0.01
brewer * 1 (F)	1		23		24	1.5
bricklayer (G)				4	4	0.2
brickmaker (G)			2	3	5	0.3
butcher (F)	3	3	8	1	15	1
carpenter (C)	8	14	44	22	88	5.4
cloth&linen weaver (B)	8			15	23	1.4
cooper (C)	3	7		12	22	1.3
figuremaker (M)			1	1	2	0.1
glazier (M)				3	3	0.2
hatter (B)			1	2	3	0.2
herdsman (M)	3			1	4	0.2
hunter/hunter (M)			3	2	5	0.3
husbandman (A)	32				32	2
husbandman&vinedresser (A)	113	196	456	262	1027	62.7
joiner (C)	3	5	8	5	21	1.3
labourer (M)		2			2	0.1
linen weaver (B)		9	27		36	2.2
locksmith (D)			1	1	2	0.06
maison * 2 (G)	2	9	28	7	46	2.8
milliner (F)	5	4	9	10	28	1.7
miner (M)	1		2		3	0.2
potter (M)			3		3	0.2
saddler (E)	1	1	2	1	5	0.3
school master (H)	1	3	5	6	15	0.9
shoemaker (E)	5		20	9	34	2.1
silversmith (D)		2			2	0.1
smith (D)	11	9	15	12	47	2.9
stocking weaver (B)	1		2	3	6	0.4
surgeon (I)			2	1	3	0.06
tailor (B)	3	19	18	16	56	3.4
tanner (E)	1	3	2		6	0.2
tile (M)			1		1	0.06
turner (M)		4	2		6	0.4
wheel (M)	1	5	5	3	14	0.9
woolweaver (B)		6	2		8	0.5
student (divinity)	1				1	0.06

(註) * 1 D64、D68ではCooperと同じ * 2 D69ではmaison & stone cutter

(出典) J.Tribbeko and G.Rupertii (eds.), *Lists of Germans from the Palatine who came to England in 1709*より作成した。
なお割合については数値を四捨五入した都合上、合計が100%になっていないものがある。

にカトリック教徒の存在を認めることへの嫌悪感はいまだ健在であった。バラタイン移民にカトリック教徒の存在が認められたことは、移民集団としてのバラタイン移民に対する不信感をイングランド社会に与えた。そのことが彼らの受容拒否につながったとしても、不思議ではないであろう。

最後に職業に関する分析結果についてである(表7-1、表7-2)⁽³²⁾。『到着者リスト』において、職業の記載がある世帯主は1636人であり、その職種は37種である。さらに世帯主として学生が1人記録されている。もっとも人数が多いのはブドウ園園丁と農夫の農業従事者で、その両方を兼ねてい

る場合もある。その数は1059人で全世帯主の約65%であった。ついで、織物・被服関連業従事者の132人、木工業の131人、飲食関連業の101人と続く。単独の職種としては、農夫・ブドウ園園丁がもっとも多く1027人。ついで、大工の88人である。その次が仕立業従事者で56人となっている。パラタイン移民の職業構成に関する別の記録においても、人数に違いはあるものの、同じ傾向がみられる⁽³³⁾。世帯規模と職業の関係を見た場合、農夫・ブドウ園園丁は独身者の割合（約1割）が低く、石工や大工、仕立業者や毛織物工など職人層ではその割合が5割を越える傾向がみられる⁽³⁴⁾。1708年から1709年にかけての冷害とパラタイン移民の移動が関連づけられる理由は、彼らに占めるブドウ園園丁の割合が高いことによるものである。そこに家族の有無を重ね合わせるならば、家族での移動を強いられるほど、その被害が深刻であったことがうかがえる。

（3）パラタイン移民の特徴

前節の分析から、その対象がパラタイン移民の半数とはいえ、移民集団としての彼らの特徴の傾向は確認できたと思われる。近世イングランドにおける他の移民集団と比較した場合、パラタイン移民にはどのような特徴があったのか。最後にその点を検証する。

人数に関していえば、16世紀後半の在英外国人は、ロンドンとその周辺で常時4000－5000人、多く見積もっても約7000人であった。1680年代に流入が始まったユグノーの場合、1690年代までで約15,000人、1710年ごろで約21,000人であった。世帯規模についてはパラタイン移民も先の2つの移民もそれほど差はない。いずれも夫婦と子どもが1～3人という比較的小規模世帯であった⁽³⁵⁾。先の2つの移民集団と比較した場合、パラタイン移民はその人数や世帯規模が突出していたわけではない。しかしながら、先の移民たちが、波はあるにせよ、複数年にわたって徐々に入国、定住したのに対して、彼らは1年間で約13,500人もの流入であった。次々と上陸する彼らから受けるインパクトはユグノーのときのそれを遙かにしのぐものであったはずである。

16世紀後半の在英外国人たちやユグノーと比較した場合、両者とパラタイ

ン移民との差異が顕著なのは、宗派と職業であろう。この点はこれまでも指摘されてきたことであるが、『到着者リスト』の分析により、それが確認された。宗派に関しては、16世紀後半の外国人調査でも重要視された項目である。16世紀後半の場合、多くがオランダ人教会かフランス人教会、教区教会のいずれかに所属しており、ロンドン居住の外国人は基本的にプロテスタントであった⁽³⁶⁾。17世紀後半のユグノーに関しては、その信仰について疑問の余地はないと思われる。そうであってもフランス人教会は義援金の支給にあたっては、受給者の信仰確認を行っている⁽³⁷⁾。いずれにせよ、パラタイン移民に先立つ彼らには、たとえ移動の真の動機が経済的なものであったとしても、プロテスタントというイギリス社会側にとって受容・救済のための大義が存在した。一方、前節で明らかになったように、パラタイン移民にはカトリック教徒が混在していた。イギリス側は受容の対象をプロテスタントに限定し、改宗しないカトリック教徒を大陸に戻している。しかし、カトリック教徒が存在したこと、そこから示唆されるパラタイン移民たちの移動目的、すなわち動機が宗教迫害ではないということは、彼らの職業構造と併せて、彼らを排除するための口実を与えた。

移民を受け入れる社会にとって、移民が自立し、救済の対象外であることが望ましいのは言うまでもない。たとえ、救済が必要であっても、移民からどのような経済的・文化的貢献を期待できるか、それはホスト社会にとって無視できない問題であった。16世紀後半のロンドン在住外国人も、17世紀後半に到来したユグノーもパラタイン移民と同じように、決して豊かとは言えず、貧しい人々が多数含まれていた。そうであったとしても、先の移民たちについては、その受容は可能であった。既存の研究がすでに明らかにしてきたように、パラタイン移民に先立つ移民たちにはイギリス社会への貢献が期待できたからである。16世紀後半の移民の場合、1593年の段階で織布工や仕立工を中心とした織物関連産業従事者が世帯主の約4割を占めていた。イングランド人職人やギルドからの反発はあるものの、王権も政府も技術者であった彼らの庇護に積極的であった。また、関税収入等で利益をもたらす商人も多く含まれていた。また、ユグノーについても、絹織物産業を中心に技術者が多数いたことが、信仰と併せて、彼らのイギリス社会への受け入れを可能

にした⁽³⁸⁾。しかし、バラタイン移民については、ブドウ栽培を主とする農業従事者が多い一方、職人の数は少なく、彼らからは技術移転を期待できないことは明白であった。バラタイン移民の支援者たちが、農業従事者としての潜在能力や技術訓練による職業的能力向上の可能性を提起するものの、そのような声は「無能」、「怠惰」といったバラタイン移民に対する社会のまなざしを覆すに至らなかった⁽³⁹⁾。

4. むすびにかえて

以上、『到着者リスト』に則してバラタイン移民の実態を明らかにしてきた。16世紀後半のロンドン在住の大陸出身者たちも、17世紀後半のユグノーたちも、その流入に際しては、概ね歓迎されている。しかし、バラタイン移民についてはそうではなかった。彼らの宗派と職業の構成が移民集団としての彼らの受け入れの障害となったことは間違いないであろう。加えて、彼らを守るべきドイツ人教会の力が不十分であったことも、彼らには不利な条件であった。大義無き「ありがたくない移民」の到来に直面したとき、そのような移民受け入れの可否をめぐる議論は、それまで移民支援を旨としてきたイギリス社会にその方針の再考を迫った。さらには、イギリス社会に受容されるべき者、ひいては帰属すべき者についての自己認識を促す契機となったはずである。

本稿では、限られた史料からではあったが、バラタイン移民の実態の一端を明らかにした。この結果を踏まえ、バラタイン移民へのイギリス社会側の対応のより詳細な検証を通じて、この時期の移民に対するイギリスの法的・福祉的諸対策について明らかにすることを今後の課題としたい。

【註】

H.S.: Huguenot Society of London Quarto Series

- (1) D.Statt, *Foreigners and Englishmen: The Controversy over Immigration and Population, 1660-1760*, London, 1995, chs.1, 5-7. W.O'Reilly, 'The Naturalization Act of 1709 and the Settlement of Germans in Britain, Ireland and the Colonies', in R.Vigne and C.Littleton (eds.), *From Strangers to Citizens: The Integration of Immigrant Communities in Britain*,

- Ireland and Colonial America, 1550-1750*, Sussex Academic Press, 2001, pp.492-502 (以下、*From Strangers to Citizens*と略す)。川北稔、「イギリス人になれなかったドイツ人たち—イギリスへの最初の外国人労働者導入計画—」、合阪學編、『西洋における移動と移民の史的構造』(平成9-11年度科学研究費補助金 基盤研究(B)(2) 課題番号09410101 研究成果報告書)、2000年、11-13頁。
- (2) H.T.Dickinson, 'The Poor Palatines and the Parties', *The English Historical Review*, No. 324 (1967), pp.464-485 (以下、Dickinson, 'The Poor Palatines'と略す)。Id., 'The Tory Party's Attitude to Foreigners', *Bulletin of the Institute of Historical Research*, Vol.40 (1967), pp. 153-165. M.S.Beerbühl, 'Naturalization and Economic Integration: The German Merchant Community in 18th-Century London', in *From Strangers to Citizens*, pp.511-518.
- (3) W.A.Knittle, *Early Eighteenth Century Palatine Emigration*, Baltimore, 1937 (rep.1982). H.A.Homes, *The Palatine Emigration to England in 1709*, Albany, 1871. Statt, *op.cit.*, pp.121-165.
- (4) P.Panayi, 'Germans in Britain's History' in id.(ed.), *Germans in Britain since 1500*, London, 1996, p.6 (以下、*Germans in Britain*と略す)。
- (5) S.Katsuta, 'German Palatine Immigration of 1709: An Aspect of the Transition from an Ireland of immigration to an Ireland of Parliament' in K.Kondo(ed.), *State and Empire in British History: Proceedings of the Fourth Anglo-Japanese Conference of Historians, 10-12 Sep.2003, International Community House, Kyoto, Japan*, Tokyo, 2003, pp.23-45. 勝田俊輔、「アイルランドのプファルツ移民」、『史学雑誌』、第110巻第8号(2001年)、87-93頁。
- (6) R.Gwynn, *Huguenot Heritage: The History and Contribution of the Huguenots in Britain*, London, 1985. 須永隆、「ヨーロッパの宗教戦争とイングランドへのプロテスタント亡命難民—ロンドンにおける外国人の教会生活と経済活動—」、今関恒夫他編『近代ヨーロッパの探求3 教会』、ミネルヴァ書房、2000年、206-242頁。金智雄、「ユグノーの経済史的研究」、ミネルヴァ書房、2003年、161-186頁など枚挙にいとまがない。R.Gwynn, 'Patterns in the Study of Huguenot Refugees in Britain: Past, Present and Future' in I.Scouloudi(ed.), *Huguenots in Britain and their French Background, 1558-1800*, London, 1987, pp.217-235 (以下、*Huguenots in Britain*と略す)。拙稿、「近世ロンドンの外国人—イギリス財政における外国人の貢献—」、『西洋史学』、184号(1997)、51-66頁(以下、拙稿「近世ロンドンの外国人」と略す)。
- (7) A.Pettegree, *Foreign Protestant Communities in Sixteenth-Century London*, Oxford, 1986. I.Scouloudi, 'The Stranger Community in the Metropolis 1558-1640', in *Huguenots in Britain*, pp.42-52. Id.(ed.), *Returns of Strangers in the Metropolis 1593, 1627, 1635, 1639*, H.S., Vol.57, London, 1985 (以下、*H.S.57*と略す)。拙稿、「近世ロンドンの外国人」、51-66頁。
- (8) ユグノー・ソサイエティの活動については<http://www.huguenotsociety.org.uk/>を参照。ナントの勅令廃止300周年にあたる1985年にはロンドンミュージアムでもユグノーの過去を振り返る展覧会が行われた。T.Murdoch, et al. (eds.), *The Quiet Conquest, the Huguenots 1685-1985*, London, 1985.
- (9) K.Prestwich(ed.), *International Calvinism 1541-1715*, Oxford, 1985. 西川杉子、「プロテスタント国際主義から国民意識の自覚へ—1680年代〜1700年代のイングランド国教会をめぐる—」、『史学雑誌』、第105巻第11号(1996年)、1-29頁。
- (10) J.Tribbeke and G.Rupert(eds.), *Lists of Germans From the Palatinate Who Came to*

England in 1709, New York, 1990 (以下、*Lists of Germans* と略す)。

- (11) N.Luttrell, *A Brief Historical Relation of State Affairs from September 1678 to April 1714*, Vol.6, Oxford, 1857, (rep.1969), pp.393, 399.
- (12) (1) 節全般については以下の文献を参照した。Knittle, *op.cit.*, pp.1-31.
- (13) (2) 節全般については以下の文献を参照した。Luttrell, *op.cit.*, pp.453-4, 474. Knittle, *op.cit.*, pp.47-81. Dickinson, 'The poor Palatines', pp.464-485. P.Panayi, 'Germans in Eighteenth-Century Britain', in *Germans in Britain*, pp.31-30(以下、Panayi, 'Germans' と略す)。
- (14) *Ibid.*, p.31.
- (15) *The London Gazette*, 16-20, June, 1709. A Brief for the Relief, Subsistence and Settlement of the Poor Distressed Palatines, London, 1709 (Guild Hall, PB.Closed Access Proc.25.17). A.Olson, 'The English Reception of the Huguenots, Palatines and Salzburger, 1680-1734:A Comparative Analysis', in *From Strangers to Citizens*, p.482 (以下、Olson, 'English Reception' と略す)。西川、前掲論文、10-11, 21-22頁。
- (16) Panayi, 'Germans', p.41. S.Steinmetz, 'The German Churches in London, 1669-1914', in *Germans in Britain*, pp.50, 54. Olson, 'English Reception', pp.482-3, 486, 489 (note 4) .
- (17) *The London Gazette*, 6-9, August, 1709. Knittle, *op.cit.*, pp.72-77. Olson, 'English Reception', pp.482-3. Dickinson, 'The poor Palatines', pp.456-477.
- (18) Knittle, *op.cit.*, pp.82-97. 勝田、前掲論文、88-89頁。
- (19) Knittle, *op.cit.*, pp.75-77. 拙稿、「嫌われ、行き「場のない」可哀想な移民たちーパラティン移民への支援とその限界ー」、藤川隆男編『空間のイギリス史』、山川出版社、2005年、19-7-208頁。Cf., A.Olson, 'Huguenots and Palatines', Phi Alpha Theta, History Honor Society Inc., 2001 (<http://www.findarticles.com>) .
- (20) Knittle, *op.cit.*, pp.248-274 (P.R.O., T I/119, 6-10, 19-26, 68-72, 58-65, 79-82) .
- (21) Panayi, *op.cit.*, p.41.
- (22) Knittle, *op.cit.*, pp.72-74.
- (23) 16世紀後半の外国人調査については、H.S.57, R.E.G.Kirk and E.F.Kirk(eds.), *Returns of Aliens:Dwelling in the City and Suburbs on London from the Reign of Henry to that of James I*, H.S., Vol.8 in 4 parts, 1990-8 (以下、H.S.8と略す)を参照。denizationは居留権取得のことである。須永、前掲論文、233-234頁。外国人の法的地位については、拙稿、「近世イングランドにおける外国人の法的地位ー16世紀の事例を中心にー」、『待兼山論叢』第34号史学編(2000年)、1-24頁を参照。
- (24) Knittle, *op.cit.*, pp.65-66.
- (25) 以下、この節のデータについては、特記しない限り*Lists of Germans*に所収されている史料を用いた。
- (26) A.L.ベア/R.フィンレイ(川北稔訳)、『メトロポリス・ロンドンの成立ー1500-1700年までー』、三樹書房、1992年、53頁。
- (27) 女性の世帯主については、30歳代が23人、40歳代が22人、50歳代が27人、60歳以上が22人である。*Lists of Germans*, *passim*.
- (28) Knittle, *op.cit.*, p.70.
- (29) *Lists of Germans*, p.20.
- (30) Knittle, *op.cit.*, pp.274-282 (P.R.O., T I/119, 136-153;T I/132, 167-170).
- (31) *Ibid.*, pp.66, 77-79. Luttrell, *op.cit.*, pp.473, 489.

- (32) 表7-1、7-2で採用した職業分類は比較のために、*H.S.57*, pp.133-135とA.P.Hands and I. Scouloudi(eds.), *French Protestant Refugees Relieved through the Threadneedle Street Church, London 1681-1687*, H.S., Vol.49, London, 1971 (以下、*H.S.49*と略す), p.192の分類に準じた。
- (33) 別の記録によれば、1232人中800人が農業従事者で、織物・被服関連産業従事者は100人、大工が100人となっている。Olson, 'English Reception', p.486.
- (34) データーが最も多いD.68のリストから試算した。*Lists of Germans*, pp.19-34.
- (35) *H.S.57*, pp.88-84. *H.S.49*, p.228. 拙稿「近世ロンドンの外国人」, 53-54頁。拙稿、「17世紀後半のロンドンにおける外国人義援金受給者」*EX ORIENTE* (大阪外国語大学言語社会学会)、第7号(2002年)、55-74頁。
- (36) *H.S.57*, pp.75, 86. *H.S.8*, passim.
- (37) R.Gwynn (ed.), *Minutes of the Consistory of the French Church of London, Threadneedle Street 1679-1692*, H.S., Vol.58, 1998, p.132.
- (38) *H.S.57*, pp.133-135. *H.S.49*, pp.190-191. R.Gwynn, *The Huguenots of London*, London, 1985, p.15.
- (39) *Review*, 5 July 1709, in D.Defoe, *Defoe's Review*, Vol.6, New York, 1965, p.157. Olson, 'English Reception', pp.483-487. Dickinson, 'The Poor Palatines', pp.464-485.

[本稿は文部科学省科学研究費平成14～16年度若手研究(B)による研究成果の一部である。]